

沼津高架PI プロジェクト  
第1回 合同勉強会 話題提供  
PIにおける話し合い

2013.5.25

沼津駅付近鉄道高架事業に関するPI委員会 委員長  
筑波大学 教授  
石田 東生



## PIにおける話し合い



- 話し合いは争論(ディベート)ではない。
  - 争論: 相手を論破する
  - 話し合いに勝ち負けはない
- 話し合いは情報提供と共有の場である。
  - 多様な立場、見方、関心、懸念の存在することの表明と相互理解
  - 参加者の多様性と広がり重要だが、その構成はそれほど意味を持たない
  - 参加者相互の信頼関係の醸成
- ファシリテータ・事務局はそのサポート役。
  - 出来るだけ客観的なデータの提供
  - 話し合いの整理とよい進行
- PIにおける話し合いは決める場ではない。
  - 意思決定者が自信をもって決定できる環境作り

# 日本の伝統的話し合い



## 宮本常一 民俗学者、膨大なフィールド調査。1907-8.1-1981.1.30



1951-1952に対馬調査

伊奈集落で区有文書の借用を依頼。村の寄り合いで議論している。一斗の米を持って次の調査地まで三里のみちを歩かなければならない。3時を過ぎても回答が来ない。

「三日でたいいのむずかしい話もかたがついたという。気の長い話だが、とにかく無理はしなかった。みんなが納得のいくまではなしあった。だから結論が出ると、それはキチンと守らねばならなかった。話といっても理屈をいうのではない。一つの事柄について自分の知っているかぎりの関係ある事例をあげていくのである。話に花がさくというのはこういう事なのであろう。」

対馬にて(「忘れられた日本人」1960に所収)から

本来の話し合いの姿。しかし時間がかかりすぎる。範囲も狭い。現代では難しいので、PIという形とプロの手助け。

## これまでの勉強会を振り返ると、



- 全国でもほとんど初めての試み。世界的にも珍しい。
- 成果を出しつつある。
  - 広範囲からの多様な人の情報と意見交換の場
  - 話し合う雰囲気形成
    - 話し合いの前提としての信頼の形成
    - メンバー、行政、ファシリテーター
  - 直接的成果
    - 課題認識の共有
    - 評価の考え方の共有
- 自信と誇りをもって、ただし慢心することなく進めていただきたい。

# そのためにも、お願い

---



- 議論の輪を、仲間を拡げる
- 築かれた関係性のさらなる強化と活用
  - 難しい局面が必ず現れる
- これまでの、コミュニケーション結果の活用
  - 個人情報の扱いには最新の留意をした上で、記録データを活用できるように情報化する
  - 今後のより良い話し合いへの活用(沼津にもそれ以外にも)
  - 大学や研究者の力の活用(貴重なデータなので興味がある人が多い)

ご清聴、ありがとうございました。